

2022（令和4）年2月26日

日吉真美 博士請求論文 審査報告書

主査	人間科学研究科	安部 計彦
副査	同	倉田 康路
副査	同	安藤 花恵

本審査委員会は、日吉真美氏の博士請求論文「『ひきこもり』からの回復プロセスに関する研究」を審査し、また「査読付き論文」日吉真美（2019）「『ひきこもり』当事者が乗り越えてきたものー全国のひきこもり地域支援センターを利用している当事者においてー」社会福祉学 60（3）、52-62、「その他論文2本」として、日吉真美（2020）「『ひきこもり』の家族要因に関する先行研究レビュー」西南学院大学大学院研究論集 10、1-32 と日吉真美（2021）「通院経験有無別『ひきこもり』からの回復プロセスーA市ひきこもり地域支援センターを利用する『ひきこもり』当事者へのインタビュー分析からー」西南学院大学大学院研究論集 12、23-40 を確認した。3編とも日吉氏の単著である。

そのため、本論文は博士論文提出の基準を満たすものであり、事前審査の結果提出が許可され、学長に提出されたものである。その後、審査委員会の審査及び最終試験（口述試問）を行なったのでその結果を報告する。

1 論文の概要

日吉氏の論文構成と内容を概観すると以下の通りである。

まず「1『ひきこもり』の定義および実態調査」で社会的課題であるひきこもりの定義と実態を示し、「2『ひきこもり』支援に関する法律とその成り立ち」で支援の法制度を整理し、「3『ひきこもり』への支援」では現在行われているさまざまな支援を紹介し、「4ひきこもり地域支援センターの役割と法的な位置づけ」で、その活動内容を紹介した。

そのうえで「5先行研究とその課題」で医学、心理学、社会学等の分野を含めて広くひきこもりに関する先行研究を精査したうえで、課題として①量的研究がない、②ひきこもりからの回復を社会復帰としており、回復のハードルが高くなっている、③ひきこもりからの回復における経験や心情について当事者から聞き取った学術研究がない点を挙げ、ひきこもり当事者への直接的な調査の必要性を求めている。

そのため「6研究の目的・方法・意義」では「ひきこもりから回復に至るまでのプロセスを経験と心情の視点から明らかにすることおよびその支援策を検討する」ことを目的とした。方法としては、ひきこもり最中の当事者への接触は困難であり、また社会復帰は回復にとってハードルが高いため、ひきこもり地域支援センター（以下「センター」とする）に通ってきている方に、ひきこもり当時を振り返っていただく方法を採用した。またセンターに

通ってくることで回復したという操作的定義を行って研究を行った。

「7第1調査」では、A市センターに通っている当事者11名に対して半構造化面接を行い、その内容をGTAで分析した。その結果、59項目5分野が抽出され、①通院経験の有無で回復プロセスに差があること、②社会復帰ができて「人とのかかわりを遮断した」など行動面でのひきこもりだけでなく「心理的ひきこもり」があることなどが明らかになった。

次に「8第2調査」では、全国すべてのセンターを対象に活動内容と支援の課題などを調査すると同時に、ひきこもり当事者の支援機関についての郵送によるアンケート調査を行った。その結果、回答率は32.0%であったが、支援者も模索状態であることが判明した。

「9第3調査（本調査）」では、第1調査で得られた項目を質問として第2調査で収集した支援機関291カ所すべてに対して郵送による当事者へのアンケート調査をおこなった。その結果105名から回答があった。これをひきこもりからの回復のプロセスを抽出するため分散分析を行った。分析の結果、ひきこもり当初から回復後まで一貫して低かったのは「家族への精神的な依存」であり、逆に一貫して高かったのは「共有スペースでの日常的な家族との交流」であった。またひきこもり当初から回復後までに増加したのは「人生を変えたいという思い」や「活動量」など8項目、逆に低下したのは「思考停止期間」や「苦悩や不安、恐怖感」など4項目であった。

この3つの調査を踏まえ「10総合考察」では、ひきこもりからの回復の全体像を明らかにして、回復への「自転車補助輪モデル」という支援モデルも示された。さらにひきこもりの状態に応じた段階別に必要な支援策の示唆が示された。

最後に「11結論」として、この研究によって明らかになった新たな知見として「焦り等から行動が増加すると不安等が減少し、不安等が減少すると、さらに行動が増加する」など7つが提示された。

2 論文の評価

(1) 研究の社会福祉学上の意義

この研究での研究対象となるひきこもりの人たちについては、社会福祉の分野において新たな支援の対象として極めてニーズの高い対象となっているが研究は追い付いていない状況が認められる。研究上だけでなく、これらの人たちへの支援を行ううえでの制度、取り組み、サービスという実践上にも、これからの整備されていく途中にあり、大きな社会的課題である。このような中で接触が困難なひきこもり当事者を研究対象にし、その経験と心情を手掛かりに、ひきこもり当初から回復までのプロセスをインタビューやアンケート調査で明らかにしたことは社会福祉分野だけでなくひきこもりへの支援にかかわる多くの関係者に大きな示唆を与える論文である。

また当事者しかうかがい知れないひきこもりからの回復プロセスが明らかになったことは、学術的に高く評価できる。

(2) 研究の独創性

本論文の独創性は以下の6点が挙げられる。

- ①ひきこもりに関する先行研究は事例研究だけであり、量的研究を初めて行った点である。第2調査で行った全国すべてのセンターからの回答は32.0%と多くはないが、紹介された支援機関すべてに当事者への質問票を送るという、把握可能な方法をすべて使い全数調査を行ったとも言える。
- ②就労など行動面ではひきこもり状態を脱していても、内心はひきこもっている「心理的ひきこもり」を発見した点である。論文中に明確な記載はないが、この概念はひきこもり当事者がしばしば回復とひきこもりを繰り返す行動の理解に示唆を与える発見である。
- ③ひきこもり当初から回復まで個人差も大きい、量的調査の結果、大勢として増加する経験や心情、減少する経験や心情が明らかになった。このことは、支援に際してターゲットとする経験や心情が明らかになると同時に、支援者が変化を捉える指標が示唆された。
- ④インタビュー調査のGTAとアンケート調査の分散分析を総合的に捉え、ひきこもり状態からの回復のプロセスの全体像が明らかになった点である。影響は双方向だったり複数の経験や心情に影響を与えていたが、その複雑な関係性を図にして可視化した点は高く評価される。
- ⑤以上の結果から、部屋から出ない段階、家から出ない段階、センターに通う段階、社会復帰という段階ごとに必要な支援策の示唆を示した点である。多様な状態に即した支援策の示唆を示したことも独創性があり、実務的な意義でもある。
- ⑥この研究はセンターに通っている方に過去を振り返って調査をする方法をとった。研究対象への接触困難の側面もあるが、逆にセンターまで通える当事者は全員が家族との良好な関係を持っていた。このことは、ひきこもって接触が困難な当事者に対しては、まず家族内での安全で安心できる状態することが優先課題であることが示唆された。

(3) 論理的ー貫性

本論文では、ひきこもり、回復、プロセス、経験、心情の4つのキーワードをしっかりと定義づけたうえで、ひきこもりが始まった時点の起点として、ひきこもりの状態から回復した時点である終点というひきこもりの期間のなかで、どのような経験があつて、その経験からどのような感情が生じたのか、その変化のプロセスがまとめられるものとなっている。すなわち、経験と心情という視点から明らかにするひきこもりからの回復プロセスという研究の枠組みということになる。

その結論に当たるものを図示し、3つの調査による実証的な分析により、ひきこもりが発生した時点から回復した時点に至るまでの間に、どのような経験があつて、それに伴いどのような心情があつたのか、わかりやすく要因別に示され、相互に関連付けられてまとめられている。この1枚にまとめられているのがこの研究の結論のメインであり、得られた知見である。ひきこもりの出現から回復というスパンのなかで経験と心情という組み合わせ

のなかでどのように変化していったのかというこの研究独自の視点の中から新たな知見がまとめられ、論理的な一貫性がみられる。

(4) 研究者としての評価

本論文は目的に沿って複数の分析方法を用いており、その分析や結果の解釈に問題はない。査読論文は社会福祉学の研究誌としては最も権威があるとされているが、その査読を経て掲載されたことは研究者としての資質は十分であることを示している。

また大学院論集に毎年投稿することで研究を進めると同時に論文執筆の技術を積み上げ、研究者としての努力を重ねてきた。

さらに修士時代から一貫して同じテーマに取り組む根気強さと、当事者に聞くという社会福祉学の重要な視点を揺るがずに持ち続けている。一方、副査をはじめ多くの先輩や関係者にも助言を求め、その指摘を自分の中でゆっくり咀嚼しながら研究を進めるなど、研究者としての資質は十分である。

3 結論

日吉氏の論文は、接触が困難である一方、大きな社会問題であるひきこもり当事者に対してインタビューによる質的研究やアンケートによる量的研究を踏まえ、ひきこもり直後から回復までの経験や心情に焦点を当てることで回復までのプロセスを研究したものである。その社会福祉学的意義は高く、研究内容もしっかりした研究枠組みの中で論理的に考察されており、新たに発見された知見も多く独自性の高い論文となっている。

すでにセンターに通っている当事者からの研究という制約はあり、すべてのひきこもり当事者の回復プロセスを明らかにしたものではないが、学術だけでなく実務的にも支援につながる社会福祉学が求める研究の有用性にも役立つ研究である。

これらのことから本委員会は日吉氏の論文は博士学位請求論文として博士(人間科学)の学位を授与されるに十分適当であると判断した。

<審議経過>

- 第1回 2021(令和3)年12月15日 事前審査論文の指摘事項の確認と本論文提出許可
- 第2回 2022(令和4)年1月19日 博士請求論文の審査と口実試験の許可
- 第3回 2022(令和4)年2月9日 公開口実試験
- 第4回 2022(令和4)年2月21日 報告書の確認